『筑波日本語研究』 第九号 筑波大学 人文社会科学研究科 日本語学研究室 2004

現代日本語の過去テンスについて
―韓国語との対照の観点から―

許　宰碩

キーワード：動き、変化、変化時点、発話時、完結性、状態性

要　旨

本稿では、日本語の「た」は動きの変化時点が発話時以前であることをあらわすのに対し、「ている」は発話時に捉えられる状態をあらわすとみる。そのため、日本語の「た」は発話時に持続する状態をあらわすことができない。たとえば、発話現場での「ランナー、走った」のような表現は、持続する動きをあらわすのではなく、「走っていない」状態から「走っている」状態への変化時点が発話時以前であることをあらわしている。日本語の「た」は状態性を有していないとみられる。このことは、日本語の「た」と韓国語の「eoss」との比較対照を通して明らかになってくる。両者は基本的に同じ働きをしているが、次のような二点において相違が見られる。一つは、韓国語の「eoss」は、発話時以前に動きが完結していないと、使いにくいようである。もう一つは、韓国語の「eoss」は状態性を有しており、現在の状態をもあらわすことができる。「た」と「eoss」の相違は、両言語の歴史的な変化の反映であることを示唆する。

1. はじめに

＜問題１＞

日本語の「た」と韓国語の「eoss*1(었)」は同じ働きをしているといわれる。しかし、日本語は(1)(2)両方とも「た」が用いられるが、韓国語は(1)には過去形「eoss」が用いられ、(2)では非過去形「neun(는)」が用いられる。

*1 以下の韓国語は文化観光部のローマ字表記法に則る。www.ganada.org

(1)（飲み会で酒を飲まない同僚 A に酒を飲ませようとしても飲まない。何回も断った同僚 A が酒を飲みほしたのを見て）

a.あ、{飲んだ。/＊飲んでる。}

b.아, {마셨다./＊ 마시고 있다./＊ 마신다.}

(a, {masyeossda. /＊ masigo issda/＊ masinda.})

(2)（飲み会で酒を飲まない同僚 A に酒を飲ませようとしても飲まない。何回も断った同僚 A が杯を持って飲み始めた）

a. あ、{飲んだ。/＊飲んでる。}

b.아, {＊ 마셨다./＊ 마시고 있다./마신다.}

(a, {＊ masyeossda./＊ masigo issda/masinda.})

＜問題 2＞

(3)(4)は、(1)(2)とは異なり、韓国語は両方とも「eoss」が用いられるが、日本語では、(3)には「た」が用いられ、(4)では非過去形が用いられる。特に、(4)は現在の状態をあらわす文であるが、日本語は「た」が用いられないのに対し、韓国語は現在の状態をあらわす「eo issda（어 있다）」だけでなく、「eoss」も用いられる。

(3)（隣に座っていた親友が急に鼻血を流している。鼻血が親友のセーターにつくのを見て）

a.セーターに血が{ついたよ。/＊ついているよ。}

b.스웨터에 피가 {묻었어./＊ 묻어 있어.}

(seuweteoe piga {mudeosseo. /＊ mudeo isseo.})

(4)（隣に座っていた親友が急に鼻血を出した。トイレに行って顔を洗ってきた親友のセーターに血がついているのを見て）

a.セーターに血が{＊ついたよ。/ついているよ。}

b.스웨터에 피가 {묻었어. /묻어 있어.}

(seuweteoe piga {mudeosseo. /mudeo isseo.})

本稿では、このような相違はどこから生じているのかについて動き動詞[*2]を中心に検討し、両言語の過去テンスの体系づけを試みたい。特に、動きと発話時が何らかの形で関わってくるばあい、日本語の「た」と韓国語の「eoss」のずれが目立つことに着目して論を進めていきたい。日本語の「た」があらわす意味はもっぱら過去であって現在でないと見られるが、韓国語の「eoss」は過去のみならず、現在の状態をもあらわすことができる。このことは、「eoss」が状態性を保持していることから生じるとみたい。

まず、2 節では先行研究を検討し、3 節で「変化」とは何かについて論じたうえで、4 節で日本語の「た」の意味について見てみる。5 節では、韓国語の「eoss」との比較対照を行い、両言語の過去テンスの相違を明らかにしたい。

2. 先行研究の整理と本稿の立場

2.1. 先行研究

奥田(1978)は、「完成相」は動作の始発と終了をふくめてまるごとのすがたでさしだすものであるとし、「した」を「完成相過去」と名づけている。これを受けて、高橋(1985)は(2)のような発話現場で起きた動作は、動作のない状態から動作のある状態への変化をあらわす点で、動作動詞の変化動詞化とし、このばあい、運動の局面はまだつづいているのだが、始発の局面は直前にまるごと完成していると述べている。高橋は、(2)のような「した」は、(1)のように、現在と切り離された過去の動作と、過去という点での違いはないと論じている。また、(3)のような変化動詞の「した」は、現在現象している変化の結果に無関心ではないが、それは、現在点が結果の局面のなかにあることをあらわしているのではなく、結果を生じるという変化の最終点までをふくみこんで、変化をまるごとのすがたでさしだしているとしている。

一方、工藤(1995)は、「歩く、泣く、降る、鳴る」のような、変化を捉えていないがゆえに、どこで終わっても運動が成立したといえる非内的限界動詞は<完成相

*2 仁田(1982)は動き動詞を運動動詞と変化動詞に分類し、動き動詞があらわしているのは、動作や状態変化といった、何らかの形で状態を変化させる動きであるとする。本稿では、仁田(1982)に従い、状態動詞と対立する動詞を動き動詞とし、「動き＝変化」という概念で論を進めていきたい。また、運動動詞では、鈴木(1965)の運動性動詞と混同しやすいので、動作動詞と呼ぶことにする。

＞のバリアントとして、＜開始限界達成性＞があると指摘し、「ランナー、走った」のように、発話現場で起った出来事は、結果・効力の現存の問題に関係なく、過去とは言いがたいと述べている。また、(3)のような「した」は、運動自体は発話時以前に完成しているが、その運動の結果・効力が設定時点＝発話時現在に持続している[*3]ことから、＜現在パーフェクト＞としている。

生越(1997)、井上・生越(1997)は日本語の「た」と韓国語の「eoss」の使い分けを語用論的な立場から論じ、日本語は目の前の状況が生じる際の経緯全体を知覚したとき、あるいは直接知覚したのと同程度に経緯全体を把握できたとき、「た」を使うことができ、経緯全体を完全に把握できないときは、結果状態形「ている」を使わなければならないとしている。一方、韓国語の「eoss」は経緯全体を完全に把握する必要はないと述べている。

井上(2001)は「ランナー、走った」のように、動作が実現された直後（動作そのものは継続中）に「シタ」が用いられるばあい、動作の最小量が達成された（すなわち「動作量＞0」になった）段階でそこまでの動作を閉じたまとまりとして把握し、発話時直前に位置づけていると捉えている。また、(3)のように、「シタ」を用いるためには、出来事が実現された経過（少なくともその一端）を具体的な形で把握しなければならないと述べている。井上は、(2)のような「した」は開始限界を突破すれば「た」が用いられるという点で、工藤(1995)と類似しており、(3)に対する解釈は生越(1997)と相通じると見られる。

安(2001)は日本語の「た」と韓国語の「eoss[*4]」に「完成相過去」と「現在パーフェクト」を認めながら、韓国語の「eo issda」は存在文であるが、「eoss」は存在文かどうか無標であるとする。これは、韓国語の「eo issda」には存在動詞「issda(い

---

*3 鈴木(1979)は過去を「アオリスト的な過去」と「ペルフェクト的な過去」に分け、(3)のように動きの結果が発話時まで持続すると、「ペルフェクト的な過去」であると述べている。工藤(1995)は(3)の「ついた」を「現在パーフェクト」と述べているが、本稿では、パーフェクト的な意味は「た」の本義ではないと考える。「た」はもっぱら動きの変化時点をあらわすだけであって、それ以後の状態(あるいは効力）には関心がないのである。

*4 安(2001)は「eoss」に未来パーフェクトも認めているが、これも「eoss」の状態性と関係していると見られる。未来の状況に使われる「eoss」については稿を改めて論じたい。

る)」の意味が強く残っているからであると述べている[*5]。しかし、状態性の観点からすると、「eo issda」だけでなく、「eoss」も状態性を保持していると見られる。(5b)の「eoss」は状態性を含んでいるからこそ成り立つものである。状態性の有無は日本語の「た」と韓国語の「eoss」の大きな隔たりである。

(5) (山登りをしていて人が倒れているのを見る。近づいて声をかけても返事がない。「死んでいる」と思って同僚に知らせる)

a.ここに人が{＊死にました。/死んでいます。}

b.여기에 사람이 {죽었어요./죽어 있어요.}

(yeogie salami {jugeosseoyo./jugeo isseoyo.})

2.2. 本稿の立場

本稿では、日本語の「た」は「していない」状態から「している」状態への変化時点が発話時以前であることをあらわすことから過去でしかないと考える。たとえば、発話現場での「ランナー、走った」のばあい、動き自体は持続していても「走っていない」状態から「走っている」状態への変化時点が発話時以前であるため、過去になるわけである。「た」は動きの変化時点にだけ関心を持っており、変化時点以後の持続している動きの状態に関心を持っているわけではない。また、全体の経緯の把握如何は「た」の使用の付随的な条件でしかないとも考えられる。一方、「ている」は変化時点以後（のある時点）から発話時までの状態をあらわすが、それは状況の把握とは関係なく、現在の状態に関心があるなら、使いうるのである。話者は現在の眼前の状態を「ている」であらわしており、変化時点には関心がない。結局、「た」を用いるためには、「していない」状態、変化時点、「している」状態などの三局面を捉えていなければならないが、「ている」は「している」状態だけ捉えていれば用いられるのである。それに対し、韓国語の「eoss」は日本語の「た」と同様の振る舞いをしながらも、発話時以前に動き全体が終わっていなければ、使

*5 安・福嶋(2001)は、(5) のように、場所「e(に)」格と共起している「eoss」は不自然であるとし、このことは、「eoss」には存在動詞「issda」の影響がないことを示していると述べている。しかし、本稿では、(5b) の「eoss」はまったく自然であると考えられることから、やはり「eoss」にもある程度状態性が内在しているとみる。「eoss」の状態性は中世韓国語の「eo is(da)」がまだ影響しているからであろう。

いにくいといえる。また、韓国語の「eoss」は状態性の観点からすれば、日本語の「た」とは異なり、状態性を保持しており、現在の状態をもあらわすことができる。

3. 「変化」とは何か

鈴木(1965)は、金田一(1950)の言う継続動詞と瞬間動詞を、継続動詞は動きが一定の時間内継続するものであり、瞬間動詞はそれが瞬間的に行われるものであるとし、継続動詞は状態の変化とともに、そのプロセスが問題となる動きをあらわす動詞であり、瞬間動詞は変化だけが問題となる動きをあらわす動詞であると述べている。鈴木は継続動詞と瞬間動詞を運動性動詞と呼び、状態動詞と対立させて捉えている。運動性動詞は変化を含んでいるものであるが、状態動詞は変化を含んでいないものである。鈴木にとって、「運動＝変化」であって、状態と対立しているものとなっているのである。

奥田(1978)は、継続動詞は主体の動作をあらわす動詞、瞬間動詞は主体の変化をあらわす動詞に置き換え、変化は主体の変化であって、主に変化動詞に限られると述べている。奥田は、動作動詞は主体の動作の側面をとりたて、変化動詞は主体の変化の側面をとりたてるとしており、変化と動作を対立概念として捉えている。

草薙(1981)は、出来事を「静態」と「動態」に分け、「動態」は何か起こる出来事として認知されるもので、内的な変化が考えられるが、「静態」は存在として認知される現象で、それが続いている間は内的に変化がないとしている。結局、動きに変化を認めている点において鈴木(1965)と類似している。

工藤(1995)は、外的運動動詞を主体動作動詞、主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞に分類し、主体の観点であれ、客体の観点であれ、<変化>を捉えている動詞は teric な限界動詞であるとし、変化とは新たな結果状態を生み出すことによって必然的に終了する運動のタイプであると述べている。一方、動作動詞は ateric verb であるとし、動作とは成立しさえすれば、どこで中止されても動作が成立したといえる、必然的な終了限界のない非限界的な運動のタイプであると述べている。工藤によると、終了限界を突破する動きでないと、変化ではないということになり、(2)のような表現は変化ではなく、動作になる。

井上(2004)は、日中対照の観点から日本語は、動詞の完成相形式自体が時間の推移の意味を含んでおり、自動詞単独で「変化」を叙述することができるとし、「変化（＝状態出現」)」は「状態なし」と「状態あり」という二つの状況間の<境界>としてのみ存在し、それ自体に何らモノとしての実態はないと述べている。たとえば、「きれいになった」では、「きれいでない」状態から「きれいな」状態に移した

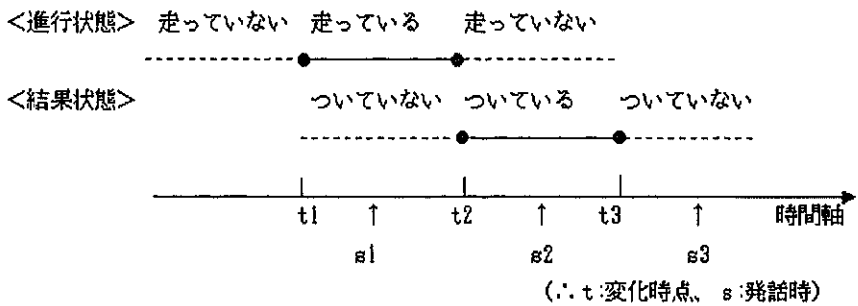
プロセス全体が言及対象となっていると解している。

本稿では、変化の意味を広く捉え、動き動詞は変化が捉えられるものと考える。次の 3 例を見られたい。

(6)ランナーが走っていない。
(7)ランナーが走った。
(8)ランナーが走っている。

この 3 例が時間的に連続していると仮定すると、二つの状態(6)(8)は(7)を境にして捉えることができる。両状態の境界を動きの変化時点といえば、(7)の「走った」はこの変化時点をあらわしている。本稿では、この変化時点を境界にした、「していない」状態と「している」状態との切り替えを<変化>と考える。[図－ 1]はこの 3 例の関係を図式化したものである。

[図－ 1]



[図－ 1]から分かるように、変化時点は二箇所に存在する。一つは「していない」状態から「している」状態への変化時点(t1)であり、もう一つは「している」状態から「していない」状態への変化時点(t2)である。この二つの変化時点は発話時との関係でいずれかが選ばれ、s1 が捉えられると、変化時点は t1 に位置し、s2 が捉えられると、変化時点は t2 に位置することになる。このように、「していない」状態と「している」状態は変化時点(t)を境界にして連続している。このことは変化動詞も同様である。たとえば、「セーターに血がついた」のばあい、「ついていない」状態から「ついている」状態への変化時点は t2 であり、「ついている」状態から「つ

いていない」状態への変化時点は t3 である[*6]。「している」状態を p と仮定すると、進行状態は t1 ＜ p ＜ t2 になり、結果状態は t2 ＜ p ＜ t3 になるのである。本稿では、「している」が進行状態か結果状態かは問題にしない。「している」状態(p)は発話時(s)に捉えられた変化時点以後(のある時点)からの状態である。本稿で注目したいのは、この変化時点が「た」の使用と深くかかわっているということである。4 節では、このことについて見ることにする。特に、「している」状態が発話時に持続するばあいを中心に論じたい。

4. 「た」の意味を機能

日本語の「た」は「していない」状態から「している」状態への動きの変化時点が発話時以前であることをあらわし、その変化時点は動きの成立時点である。

(9)（ジョギングを終えて帰ってきた息子に）

母：今日はどこを走ったの。

子：東大通りを走った。

(10)（10 キロの東大通りを完走しようと友達同士で走っている。もう疲れている A が B に）

A：どのぐらい走ったの。

B：3 キロ走ったよ。

(9)は「走る」動きが発話時以前にもう終わっているのに対して、(10)は発話時にも「走る」動きが終わっていない。しかし、(9)(10)は、その動きの変化時点が発話時以前であることは明らかである。(9)は t1、t2 の二つの変化時点が捉えられ、t1 から t2 までの動き全体が一つのまとまりとして発話時(s2)以前に位置づけられている。一方、(10)は「走る」動きは持続していても「3 キロ走っていない」状態か

*6 ただし、結果状態のばあい、動き自体は発話時(s2)以前に終わっており、t3 は変化時点であっても動きの成立時点ではない。これは t1、t2 が変化時点であり、かつ動きの成立時点であることとは異なっている。t3 は動きの成立時点ではないため、「ついた」ではなく、「ついていた」にしなければならない。t1、t2 を境界にした変化を動的な変化と言うのであるならば、t3 を境界にした変化は静的な変化と言えるだろう。本稿では、動的な変化が起こる時点を「動きの変化時点」と呼ぶことにする。

ら「3キロ走っている」状態への変化時点が発話時以前であり、その変化時点は「3キロ走る」という動きの成立時点である。(10)は 3 キロ地点を通過していないと使いにくいことから分かるように、3キロ地点が「3キロ走る」という動きの変化時点である*7。(11)も(10)と同様である。

(11)（野球中継のとき、走者が二塁に盗塁する場面）
　　キャスター：あ、走った。

(11)は、「走る」動き自体はまだ発話時に持続しており、動き全体が発話時以前に捉えられるわけではない。このため、工藤(1995)は過去をあらわさないと言っているのであろう。確かに動き全体が発話時に終わっていないため、過去でないとも言えそうであるが、(11) の焦点は「走っていない」状態から「走っている」状態への変化時点であり、動き全体ではない。このように、日本語は、動きの変化時点が発話時以前であれば、「た」が使えると考えられる。「た」は動きの変化時点とかかわっているものの、それ以後の状態には関心がないため、(11) のように、動きが発話時に持続していても用いることができる。「た」で示される変化時点は動きの成立時点であり、話者の焦点はこの動きの成立時点にあると見られる。これは変化動詞のばあいも同様である。

(12)（隣に座っていた親友が急に鼻血を流している。鼻血が親友のセーターにつくのを見て）
　　セーターに血がついたよ。

(12) の「ついた」は、「ついていない」状態から「ついている」状態への変化時点が発話時以前であることをあらわしており、発話時現在までの状態をあらわすわけではない。工藤(1995)は(12)のような「た」は現在パーフェクトをあらわすとしているが、変化時点の観点からすれば、過去でしかないと考えられる。現在パーフェ

*7「もう 2 時間歩いた」のばあいも、「2 時間」が「2 時間歩く」という動きの変化時点である。2 時間歩いていないと、「2 時間歩いた」とは言えない。「2 時間歩いていない」状態から「2時間歩いている」状態への変化時点が発話時以前であるからこそ、「2時間歩いた」といえるのである。

クトは「つく」動きが発話時直前であることから生じる付随的な意味である。「た」の意味を変化時点を媒介にして捉えることによって動き動詞の「た」を統一的に捉えることができる。先行研究では、(11)は開始限界達成性をあらわし、(12)は開始限界と終了限界が同時に捉えられるとしている。しかし、日本語の「た」は発話時以前(過去)の動きの変化時点をあらわすと定義することによってはじめて「た」の意味が一義的に捉えられるのではないだろうか。先にも述べたように、日本語の「た」は変化時点以後の状態には関心がない。(13)(14)を見られたい。

(13)（山登りをしていて一人の女性が倒れているのを発見して）

a. ここに人が倒れています。

b.＊ここに人が倒れました。

(14)（先輩と一緒に道を歩いていて偶然誰かの財布が落ちているのを見て先輩に）

a. 財布が落ちてます。

b.＊財布が落ちました。

(13)(14)は現在の結果状態をあらわす文であるが、「た」は用いることができない。(13b)(14b)が非文になるのは、日本語の「た」が変化時点以後の状態をあらわすことができないからである。「た」は点をあらわしており、「ている」のような線(＝状態)をあらわしてはいないのである。逆に、(15)は、「た」が用いられ、「ている」は用いられない。(15)は「落ちていない」状態から「落ちている」状態への変化時点にのみ焦点が置かれ、発話時まで持続する状態には関心がない。(15a) が非文になるのは、「ている」が変化時点以後（のある時点）から発話時までの状態を本義にしており、動きの変化時点をあらわせないからである。

(15)（道を歩いていて前を歩いている人の財布が落ちるのを見て）

a.＊財布が落ちてます。

b. 財布が落ちました。

このように、日本語の「た」と「ている」は状態性の有無において対立的な分布を成している。「た」は動きの変化時点が発話時以前(過去)であることをあらわし、「ている」は変化時点以後（のある時点）から発話時までの状態をあらわす働きをしている。一方、日本語の「た」は状態性を含んでいないのに対し、韓国語の「eoss」は状態性を保持している。状態性の観点からすれば、「た」と「eoss」には違いが

ある。5節では、「た」と「eoss」の比較対照を行い、両者の共通点と相違点を明らかにする。

5. 「た」と「eoss」の比較対照

5.1. 完結性の有無から

日本語の「た」と韓国語の「eoss」は基本的には過去をあらわすという点において共通している。

(16) 田中：今朝、朝ご飯食べたの。
　　오늘 아침에 아침밥 먹었니?
　　(oneul achime achimbab meogeossni?)
　キム：うん、食べたよ。
　　응, 먹었어.
　　(eung, meogeosseo.)

(17) (食事中、友達から電話がかかってきた場面)
　甲：ご飯、食べたの。
　　밥 먹었니?
　　(bab meogeossni?)
　乙：今、食べてる。
　　지금 먹고 있어.
　　(jigeum meoggo isseo.)

また、(17乙) のように、進行状態をあらわす形式として「ている」と「go issda (고 있다)」が対応している。(18)(19)を見られたい。

(18) (飲み会で酒を飲まない同僚Aに酒を飲ませようとしても飲まない。何回も断った同僚Aが酒を飲みほしたのを見て)　(=(1))
　a.あ、{飲んだ。/*飲んでる。}
　b.아, {마셨다./* 마시고 있다./* 마신다.}
　(a, {masyeossda. /* masigo issda/* masinda.})

(19) (飲み会で酒を飲まない同僚 A に酒を飲ませようとしても飲まない。しばらく経って、テーブルの上に置いてある A の杯が半分に減っているのに気づいて)

a.お、{飲んだね[*8]。/？飲んでいるね。}
b.오, {마셨네. /마시고 있네./마시네.}
(o, {masyeossne./masigo issne./masine.})

(18)(19)は、「飲む」動きの変化時点が発話時以前であって動き自体は発話時以前に終わって発話時にはもう持続していない。[図－1]から言えば、t1 から t2 までの動き全体が一つのまとまりとなり、「た」によって発話時以前に位置づけられている。このような働きは「た」と「eoss」が機能的に酷似していることを示してくれる。しかし、動き自体が発話時に持続しているばあい、日本語は「た」が使えるが、韓国語は「eoss」が使えないようである。(20)(21)を見られたい。

(20)（飲み会で酒を飲まない同僚 A に酒を飲ませようとしても飲まない。少し時間が経って、何回も断った同僚 A が酒を飲んでいるのを見て）
a.あ、{？飲んだ[*9]。/飲んでる。}
b.아, {＊ 마셨다./마시고 있다./마신다. }
(a, {＊ masyeossda./masigo issda./masinda.})

(21)（飲み会で酒を飲まない同僚 A に酒を飲ませようとしても飲まない。何回も断った同僚 A が杯を持って飲み始めた）　(＝(2))
a.あ、{飲んだ。/＊飲んでる。}
b.아, {＊ 마셨다./＊ 마시고 있다./마신다.}
(a, {＊ masyeossda./＊ masigo issda/masinda.})

(20)(21)のように、日本語は動きが発話時現在に持続していても、動きの変化時点が発話時以前であると、「た」が使える。ただし、「飲んでいない」状態から「飲んでいる」状態への変化時点を直接捉えていないと、(20)の「飲んだ」のように、「た」は許容度が落ちるようである。「飲んだ」を使うためには、「(まだ) 飲んでいない」

*8　informant 調査によると、「飲んだ」でも不自然ではないが、「飲んだね」や「飲んだじゃん」にすると、やや許容度が上がるという。一方、「飲んでいるね」は使えなくもないが、「飲んだ」や「飲んだね」に比して許容度が相当落ちるという。
*9　informant 調査によると、例(19)と同様に、「飲んだ」でも自然である人も何人かいるが、「飲んでいる」が一番自然であるとし、「飲んだ」は許容度が相当落ちるという。

状態、変化時点、「(いま) 飲んでいる」状態の三局面を捉えていなければならない。

一方、韓国語は、動き全体が発話時以前に捉えられる(18)(19)は「eoss」が使えるが、動き全体が発話時以前に捉えられない(20)(21)は使いにくいと考えられる。ここで注目したいのは、非過去形「neun(는)」の働きである。非過去形「neun(는)」は、(20)のような進行状態をあらわすだけでなく、(21)のような動きの変化時点(t1)をもあらわすことができる。先述したように、動きが発話時まで持続しているばあい、日本語は「た」が動きの変化時点をあらわすが、韓国語は非過去形「neun(는)」がそれをあらわすのである。次の3例も同様である。

(22) (赤ん坊が笑うようになってしばらく経った。ある日、家で赤ん坊を見ていたら、たまたま赤ん坊が笑い始めた。)

a.お、{笑った。/?笑っている。}

b.오, {? 웃었다./* 웃고 있다./웃는다.}

(o, {? useossda./* usgo issda/usneunda.})

(23) (赤ん坊が歩くようになってしばらく経った。ある時、赤ん坊のところに目をやったら、たまたま歩き始めた。)

a.お、{歩いた。/?歩いている。}

b.오, {* 걸었다./* 걷고 있다./걷는다.}

(o, {* geoleossda./* geodgo issda./ geodneunda.})

(24) (野球中継のとき、走者が二塁に盗塁する場面)

a.あ、{走った。/*走っている。}

b.아, {* 뛰었다./* 뛰고 있다./뛴다.}

(a, {* ttwieossda./* ttwigo issda./ttwinda.})

以上、動作動詞のばあいを見てきたが、このような現象は「寝る」「落ちる」のような、通常、変化動詞に属するといわれる動詞にも見られる。

(25) (子供を寝かせて居間に戻る妻に赤ちゃんが寝入っているかを聞く場面)

主人：寝た？

{* 잤어?/자니?}

({* jasseo?/jani?})

家内：うん、寝たよ。

네, {* 잤어요./자요.}

(ne, {＊ jasseoyo./jayo.})

(26)（地震のため、テーブルのコップが落ちるのを発見して）

a. あ、{落ちた。/＊落ちている。}

b.앗，{＊ 떨어졌다./＊ 떨어지고 있다./떨어진다.}

(as, {＊ tteoleojyeossda./＊ tteoleojigo issda./tteoleojinda.})

(25)(26)は「寝る」「落ちる」動きが発話時にも持続しており、発話時以前に動き全体を捉えることができない。(22)～(24)とまったく同じである。(25)(26)の「寝た」「落ちた」は動きの変化時点をあらわしているが、発話時以前に動き全体が終わっているわけではない。だから、動きの変化時点以後の状態をあらわす「寝ている」「落ちている」は結果状態ではなく、進行状態になってしまう。このばあい、「寝る」「落ちる」は一種の動作動詞化していると考えられる[*10]。発話時以前に動き全体が終わっていないことから、韓国語は「eoss」が使いにくいのである。

一方、韓国語も発話時に動きが持続していても、(27)(28)のように「eoss」が自然に使われるばあいがある。一見、今までの説明と矛盾しているように見えるかもしれない。

(27)（泣いている赤ちゃんを泣き止ませようとあやしているうちに笑い始める）

a.お、{笑った。/＊笑っている。}

b.오，{웃었다. /＊ 웃고 있다./웃는다.}

(o, {useossda./＊ usgo issda./usneunda.})

(28)（やかんのお水を火にかけていたが、なかなか沸かない。5 分後、ようやくやかんの口ぶたからピーと音がする）

a.お、{沸いた。/＊沸いている。}

b.오，{끓었다. /＊ 끓고 있다./끓는다.}

---

*10 たとえば、床にコップが落ちるのを見て「落ちた」といえば、それ以後の状態をあらわす「落ちている」は結果状態をあらわすから、「落ちる」は変化動詞である。韓国語は、このような文脈においては、「tteoleojyeossda」が可能である。しかし、(26)のばあい、「落ちている」状態は、「落下中」の意味であって、その動き自体は発話時に持続しており、動作動詞化していると見られる。日本人は文脈的な条件なしで「落ちている」と聞くと、結果状態であると判断しやすいことから、「落ちる」は基本的に変化動詞である。

(o, {kkeulheossda./＊ kkeulhgo issda./kkeulhneunda.})

(27)(28)は発話時まで「笑う」「沸く」動きが持続しているにもかかわらず、(22)～(26)とは異なり、「eoss」が用いられる。これは、話者が動き全体に関心を持っているわけでなく、ただ動きの変化時点にだけ焦点を置いているからである。話者にとって重要なのは動きの変化時点であって決して動き全体ではない[*11]。話者は(27)の「笑い始める瞬間」、(28)の「沸き始める瞬間」に注目しているのである。韓国語の「eoss」は動き始める瞬間(変化時点)に焦点を置くような文脈的な支えがない限り使いにくい[*12]が、日本語の「た」はこのような条件とは関係なく用いられる。

5.2. 状態性の有無から

日本語の「た」と韓国語の「eoss」は状態性を含んでいるかどうかによっても、非常に異なっている。本節では、「た」は状態性がないのに対し、「eoss」は状態性を含んでいることを見てみよう。(29)を見られたい。

(29) (隣に座っていた親友が急に鼻血を流している。鼻血が親友のセーターにつくのを見て) (＝(3))

a.セーターに血が{ついたよ。/＊ついているよ。}

b.스웨터에 피가 {묻었어./＊ 묻어 있어.}

---

*11 井上・生越(1997)は、(27)(28)のような場合、動きが開始された段階で「eoss」が使えるとし、その段階で一定の完結感を感じると述べている。本稿では、(27)(28)は動きの変化時点に焦点が置かれるから、「eoss」が使えると考える。この変化時点は動きの成立時点であるから、完結感が感じられるのではないだろうか。井上・生越は動作動詞だけを挙げているが、(28)のように、変化動詞にも同様の現象が見られる。

*12 しかし、次のような例は文脈的な条件が整っていても「eoss」が不自然であると考えられる。

(子供を寝かせようとしてもなかなか寝ない。1 時間経って、ようやく子供が寝入った時)

a.あ、{寝た。/＊寝ている。}

b.a, {＊ jassda./janda.}

ただし、「jassda」を「jamdeuleossda(寝入った)」にすれば、自然な文になる。

(seuweteoe piga {mudeosseo./＊ mudeo isseo.})

話者は動き（セーターに血がつく）の変化時点に焦点を当てている。「た」は動きの変化時点、つまり、「ついていない」状態から「ついている」状態への変化時点が発話時以前（過去）であることをあらわしている[*13]。先述したように、発話時以前に捉えられる変化時点は状態的な側面は切り捨てて、動的な側面だけを捉えている。しかし、このような見方は日本語の「た」には適しているが、韓国語の「eoss」にはそれほど当てはまらないと考えられる。

(30)（隣に座っていた親友が急に鼻血を出した。トイレに行って顔を洗ってきた親友のセーターに血がついているのを見て）　（＝(4)）

a.セーターに血が{＊ついたよ。/ついているよ。}

b.스웨터에 피가 {묻었어./묻어 있어.}

(seuweteoe piga {mudeosseo./mudeo isseo.})

(30)は結果状態をあらわす文であるが、「た」を用いることができない。一方、韓国語の「eoss」は(30)のように結果状態をあらわすことができる。このような相違は韓国語の「eoss」がまだ状態性を保持しているから生じると考えられる。まず、(30)の「ついた」が成立しないのは、日本語の「た」が「ついていない」状態から「ついている」状態への変化時点が発話時以前であることをあらわすだけで、変化時点以後の状態性には関心がないからである。つまり、「た」は現在の状態をあらわせず、「ている」が現在の状態をあらわしているのである。このように、日本語は状態性の有無において「た」と「ている」が対立しているのである。

これに対し、韓国語の「eoss」は「eo issda」とともに、現在の結果状態をあらわすことができる。つまり、韓国語の「eoss」は状態性を有しており、(30)のように

*13 たとえば、「今バスがとまった。」は発話時現在に「とまっている」状態であってもその状態をあらわすわけでなく、ただ、動きの変化時点、つまり、「とまっていない」状態から「とまっている」状態への変化をあらわすのである。当然「とまっている」状態は「今とまっている。」と言わなければならない。先にも触れたように、「とまった」を使うためには、「とまっていない」状態、動きの変化時点、「とまっている」状態の三局面を捉えておくことが条件となる。

現在の状態をあらわすことができる。結局、「た」と「eoss」の相違は状態性の有無からも求められるだろう。本稿では、現代韓国語の「eoss」は中世韓国語の「eo is (da)」から転じたものであって、「eo is(da)」の状態性をまだ保持していると考える。(31)(32)を見られたい。

(31)（山登りをしていて人が倒れているのを見る。近づいて声をかけても返事がない。「死んでいる」と思って同僚に知らせる）　(＝(5))

a.ここに人が{＊死にました。/死んでいます。}

b.여기에 사람이 {죽었어요./죽어 있어요.}

(yeogie salami {jugeosseoyo./jugeo isseoyo.})

(32)（真夜中に西大通りを歩いている時、偶然人が倒れているのを見て警察に連絡する）

a.道端に人が{＊倒れました。/倒れてます。}

b.길가에 사람이 {쓰러졌어요./쓰러져 있어요.}

(gilgae salami {sseuleojyeosseoyo./sseuleojyeo isseoyo.})

(31)(32)は現在の状態をあらわすものであるが、韓国語は「eoss」が可能である。福嶋(2003)は「動詞の格体制を変化させる～ている」について述べているが、(31)(32)の「死ぬ」「倒れる」も「ている」と結びつくことによって、「で」格から「に」格に転じる現象が見られる。このことは韓国語の「eo issda」も同じである。一方、日本語の「た」は格体制を変化させないが、韓国語の「eoss」は(31)(32)のように、格体制を変化させることがある。(31)(32)と(33)(34)を比較してみよう。

(33)a.学校で人が死んだ。

b.학교에서 사람이 죽었다.

(haggyoeseo salami jugeossda.)

(34)a.トイレで太郎が倒れた。

b.화장실에서 타로오가 쓰러졌다.

(hwajangsileseo taloga sseuleojyeossda.)

(33)(34)の「eoss」は格体制の変化は起こらないが、(31)(32)の「eoss」は格体制の変化が起こる。このような相違は、状態性の有無から生じる問題であると考えられる。先述したように、日本語の「た」は状態性を有していないため、格体制の変

化が起こらない。それに対し、韓国語の「eoss」は、(31)(32)のように格体制の変化を生じることもあれば、(33)(34)のように格体制の変化を生じないこともある。前者の「eoss」は「ている」と同様に、状態性を保持しており、後者の「eoss」は「た」と同様に、状態性を保持していない。韓国語の「eoss」は中世韓国語の「eo is(da)」から変化してきたものであるといわれるが、前者の「eoss」は中世韓国語の「eo is(da)」の状態性をまだ保持していると見られる。李南淳(1986)は現代韓国語の「eo issda」は常に存在場所の「e（に）」格を要求するとしているが、(31)(32)のように「eoss」のばあいにも存在場所の「e（に）」格と共起できることから、状態性を有していることは否めない。

韓国語は他動詞のばあい、結果状態をあらわす形式として「eo iss(da)」ではなく、「go iss(da)」が使われる。(35)はその一例である。

(35)（着物を着ている女性を尾行している。電話で同僚に彼女の格好を知らせる）

a.彼女は着物を{＊着た。/着ている。}

b.그녀는 기모노를 {입었어./입고 있어.}

(geunyeoneun gimonoleul {ibeosseo./ibgo isseo.})

(35)はいわゆる再帰表現であるが、「go issda」だけでなく、「eoss」も用いられる。李基甲(1981)よると、(35)のような再帰表現は少なくとも 16 世紀半ばには「nibgo isda(닙고 잇다)」と「nibeo isda(니버 잇다)」の二種類の状態持続があることを指摘している[*14]。「nibeo isda(니버 잇다)」は「nibeosda (니벗다) > ibeossda (입었다)」に変化するわけであるから、(35)の「eoss」と「go issda」は歴史的な変化を反映

*14 李基甲(1981)は、15 世紀の状態持続の「eo is(da)」は現代韓国語の「eo iss(da)」に比べて使用領域が広いとし、次のような三つの類型を提示している。①現在も使われるもの：sala isda.(生きている) ②現代韓国語では、「go iss(da)」の形をとるもの：nibeo isda.（着ている）③現代韓国語では使われないもの：meogeo isda.(食べてある) ②のばあい、中世韓国語の「eo is(da)」が現代韓国語の「eoss」に受け継がれており、①②は現代韓国語にも用いられると見られる。

していると見られる[*15]。李南淳(1998)は、中世韓国語の「eo is(da)」は動詞の性質に関係なく、結びつくことができたと述べているが、このことは、非限界自動詞以外の自動詞に結びつく現代韓国語の「eo issda」と相当異なっている。一方、現代韓国語の現在の状態をあらわす「eoss」は自動詞のみならず、(35)のような他動詞にも結びつくことができることから、中世韓国語の「eo is(da)」の様相とかなり類似していると判断される。結局、(35)は、「eoss」が状態性を保持していることを裏付けていると考えられる。(35)と(36)を比較してみよう。

(36) (買いものに行って服を買うつもりで試着室に入っている友達がなかなか出て来ない)

A：着た？

(다) 입었니?

((da) ibeossni?)

B：いや、まだ。

아니, 아직.

(ani, ajik.)

(36)は発話時以前に「着終わっているか」を聞く状況であるが、話者は、現在の状態に関心があるわけでなく、ただ動きの変化時点に焦点を当てている。というわけで、(36)の「eoss」は状態性を有していないと見られる。

本稿では、現在の状態をあらわす「eoss」と過去をあらわす「eoss」はまったく

---

*15 再帰表現の「eoss」は次のような進行状態と連続していると見られる。

(友だちと図書館の入り口で会う約束をして行ってみたら、手に何かを持っている)

a.手に何{持ってるの？/＊持ったの？}

b. sone mueol {deulgo issni?/ deuleossni?}

(部屋で宿題をしているところ、友人から電話がかかって来て「今、何やってるの」と聞かれる)

a. 宿題を{してるよ。/＊したよ。}

b. sugjeleul {hago isseo./ haesseo.}

このように、韓国語の「eoss」は進行状態にも使われることがあるが、このことも状態性と関係していると見られる。詳細は稿を改めて述べたい。

切り離されているものでなく、連続しているとみたい。現在の状態をあらわす「eoss」が状態性を失うと、過去の「eoss」になるのである。これは歴史的な変化の反映であり、日本語の「た」との相違を生じる原因であろうと考えられる。

6. 終わりに

以上、日本語の「た」と韓国語の「eoss」の相違点を見てきた。本稿では、「変化」の意味を広く捉え、変化時点を境界にした、「していない」状態と「している」状態との切り替えを「変化」とし、動作動詞、変化動詞を問わず、「変化」が存在するとした。変化が起こる時点を「変化時点」と定義すると、日本語の「た」はその変化時点が発話時以前であることをあらわし、「ている」は発話時に捉えられた変化時点以後（のある時点）からの状態をあらわすのである。このように、日本語の「た」と「ている」は状態性の有無において対立しているとみられる。

一方、韓国語の「eoss」は過去をあらわすものと現在の状態をあらわすものに分かれる。過去の「eoss」は日本語の「た」とほぼ同じ働きをしながら、発話時に動きが持続するばあいには使いにくい。ただし、変化時点に焦点を置くような文脈の支えがあれば、可能なばあいもある。また、日本語の「た」は現在の状態をあらわすことができないが、韓国語の「eoss」は状態性を保持しており、現在の状態をもあらわすことができる。状態性の有無は両言語の歴史的な変化の反映である。韓国語の「eoss」は中世韓国語の「eo is(da)」から変化したものであるが、まだ「eo is(da)」の状態性を失っていない。これは、「テアリ(>タリ)」から変化した現代日本語の「た」が「テアリ」の状態性を失っているのとは対照的である。中世末期日本語の「た」は状態性を保持していたという指摘もあるが、現代日本語の「た」は状態性を保持していない。状態性の観点からすれば、現代韓国語の「eoss」は中世末期日本語の「た」とかなり類似していると考えられる。

参考文献

安平鎬(2000)「結果相を表す表現と空間表現との共起関係—日韓対照を中心に」『空間表現と文法』くろしお出版

安平鎬(2001)「韓国語の「タ」:「hayss-ta（했다）をめぐって」『「た」の言語学』ひつじ書房

安平鎬・福嶋健伸(2001)「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系—アスペク

ト形式の分布の偏りについて―」『東西言語文化の類型論』特別プロジェクト研究成果報告書」
伊藤英人(1990)「現代朝鮮語動詞の過去テンス形式の用法について(1)」『朝鮮学報』137 朝鮮学会
井上　優(2001)「現代日本語の「タ」」『「た」の言語学』ひつじ書房
井上　優(2004)「日本語と中国語の「変化」の表現」『次世代の言語研究』Ⅲ 筑波大学現代言語学研究会[編]
井上　優・生越直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因―日本語と朝鮮語の場合―」『日本語科学』1 国立国語研究所
井上　優・生越直樹・木村英樹(2002)「テンス・アスペクトの対照研究」『対照言語学』東京大学出版会
岩崎　卓(2000)「日本語における文法カテゴリーとしてのテンスとは何か」『日本語学』4月臨時増刊号　明治書院
奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって(上)(下)」『国語教育』53,54　むぎ書房
生越直樹(1997)「朝鮮語と日本語の過去形の使い方について」『日本語と外国語との対照研究Ⅳ　日本語と朝鮮語』下巻　国立国語研究所
北原博雄(1999)「日本語における動詞句の限界性の決定要因」『ことばの核と周縁』くろしお出版
金水　敏(1995)「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古希記念　国語学論集』汲古書院
金水　敏(2000)「時の表現」『日本語の文法2　時・否定と取り立て』岩波書店
金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15(『日本語動詞のアスペクト』1976に再録)
草薙　裕(1981)「日本語のテンス、アスペクトの解析のアルゴリズム」『文藝言語研究6(言語篇)』筑波大学文芸・言語学系
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房
鈴木重幸(1965)「現代日本語の動詞のテンス」『ことばの研究2』秀英出版
鈴木重幸(1979)「現代日本語動詞のテンス－終止的な述語に使われた完成相の叙述法断定のばあい－」『言語の研究』むぎ書房
高橋太郎(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所
高橋太郎(2003)『動詞九章』ひつじ書房
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
仁田義雄(1982)「動詞の意味と構文」『日本語学』VOL.1　明治書院

野村剛史(2004)「近世スタンダードの動詞のアスペクト」『月刊言語』4 月号 大修館書店
福嶋健伸(2002a)「中世末期日本語の～タにおける主格名詞の制限について」『筑波日本語研究』7 筑波大学日本語学研究室
福嶋健伸(2002b)「中世末期日本語の～タについて」『國語國文』71-8 京都大学文学部
福嶋健伸(2003)「中世末期日本語のテンス・アスペクト」筑波大学博士論文
益岡隆志(2000)『日本語文法の諸相』くろしお出版
森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
高永根(1998)『中世國語 의 時相 과 叙法』塔出版社
김용경(1994)『국어의 때매김법 연구』서광학술자료사
김차균(1999)『우리말의 시제 구조와 상 인식』태학사
南基心(1978)『國語文法 의 時制에 關한 硏究』塔出版社
박덕유(1998)『國語의 動詞相 硏究』한국문화사
서정수(1990)『국어문법의 연구[Ⅰ]』한국문화사
서정수(1994)『국어문법』 뿌리깊은 나무
양경모(1994)「일본어와 한국어의 상 관련 형식들의 대조」『한글』223 한글학회
우형식(1995)「'-어 있' 과 '-고 있' 의 상적특성」『牛岩語文論集』5 釜山外大
李基甲(1981)「15세기 국어의 상태 지속상과 그 변천」『한글』173 한글학회
李南淳(1986)「'에' '에서' 와 '-어 있다' '-고 있다'」『國語學』16 國語學會
李南淳(1998)『時制・相・除法』月印
李崇寧(1981)『中世國語文法』 乙酉文化社
이재성(2001)『한국어의 시제와 상』국학자료원
정유진(1998)「근대국어의 시제」『근대국어 문법의 이해』도서출판박이정
韓東完(1986)「過去時制 '엇' 의 通時論的 考察」『國語學』15 國語學會
韓東完(1996)『國語의 時制 硏究』國語學會
許 雄(1987)『국어 때매김법의 변천사』샘문화사

ホ ジェソク／人文社会科学研究科

(2004年8月27日 受理)